

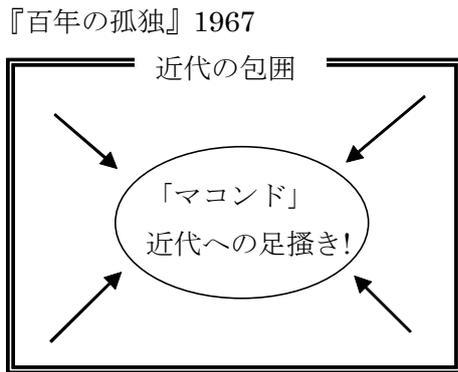
・省みて

向井和美『読書会という幸福』p.10「ひとりで喋りすぎない」

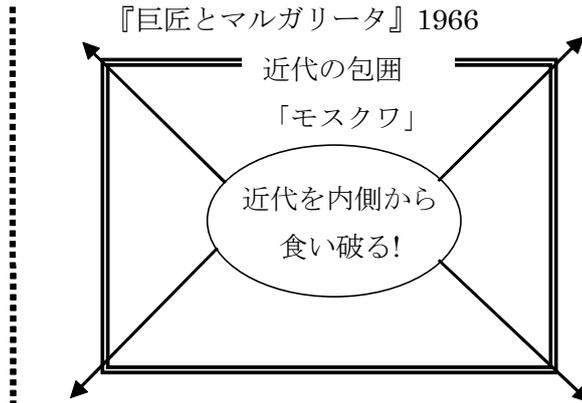
【 『百年の孤独』とよく似ていると感じた 】

- ・ブルガーコフ(1891-1940)『巨匠とマルガリータ』1966
- ・ガルシア・マルケス(1927-2014)『百年の孤独』1967

[ 図1 2つの作品の「近代」へのベクトル ]



最終的に「マコンド」は消滅してしまう!



- ・悪魔が近代の欺瞞を暴露する!  
(水木しげる(1922-2015)『ゲゲゲの鬼太郎』、柳田国男(1875-1962)『遠野物語』(1910)「平地人を戦慄せしめよ」)
- ・冒頭のゲーテ(1749-1832)『ファウスト』  
「私は永遠に悪を欲し、永遠に善をなすあの力の一部なのです」➡ 一見すると悪にみえることが善である  
宮澤賢治(1896-1933)『注文の多い料理店』  
テロリズム = 造反有理

【 図2 悪魔と編集長、イワンの対立点 】

近代的	
編集長(ベルリオーズ)、イワン	悪魔(ヴォラント)
p.24 人間がみずからを支配するにきまっています。 ➡傲慢にみえる ・無神論者	p.26 人間は自分自身を思いどおりに支配できたのだなどとおっしゃいますか?誰か、まったく別の人間に支配されていたと考えるほうが正しくはないでしょうか? P.24 よく覚えておいてください、イエスは存在していたのです(遠藤周作(1923-1996)『深い河』 大津?)

ポンティウス・ピラトゥス	イエス
法 ヨシュアを死刑判決(人間が支配)	P.60 ありとあらゆる権力は人々にたいする暴力にほかならず、皇帝の権力も、ほかのいかなる権力も存在しなくなる時が訪れるであろう、と。人間はいかなる権力も絶対に必要としない真理と正義の王国に移行することであろう。

【 注目した点 】

● 善人

ポンティウス・ピラトゥスは、ヨシュアに「善人」と呼ばれることを許さない(p.39)。なぜか。(法の執行者として、善人と呼ばれて不都合はないにもかかわらず)、ポンティウス・ピラトゥスは、みずからを省みて善人であることを引き受けきれないと感じているのではないか。逆説的だが、善人でなくともよい、ということをも自分に許したいのではないか。すなわち、人間にたいして諦念をいだきたい、人間はそんなものだと高を括りたいというニヒリズムに、じぶんとどめておきたいのだった。

じつはこのことが人間を裁くこと、裁きつづけることを可能にする。なぜなら、もし、人間にすこしでも期待をもっていたら、人間を裁くことなどできなくなってしまうから。あるいは、(すでにこれまでも人間を裁いてきたのだとしたら)人間への期待を踏みにじってきたという罪責感に押し潰されてしまうから。

げんに、この無意識?の罪責感が、ポンティウス・ピラトゥスに頭痛をもたらす。ヨシュアはむしろ、「悪人なんて、この世に存在しません(p.54)」と断ずる。もし、ヨシュアがいうとおり、悪人がこの世に存在しなかったのなら、法のものとしてこれまで葬ってきたのはなにか、という戦慄すべき罪責感がポンティウス・ピラトゥスを呑み込んでしまうだろう。

しかし、人は期待するのだ。 Good morning!

ポンティウス・ピラトゥスに Good morning といったら?

● 首

近代的な、啓蒙された無神論者として登場するベルリオーズ。彼はしかし、轢死し、首が切断される。そして首が、ラテン語で Caput(ケイプト)、Capitaneus すなわち、Capital、Capitalism のもとになることばだということに想到するとき、この首が切断されるという描写は、象徴的に選び取られたものだと考えることができる。

近代がなおざりにしてきたものからの手痛いしっぺ返し、「人間がみずからを支配する」などという傲慢さをもつとき、その首を握ぐべく悪魔はやってくるのではないか。つけ払いはやり過ぎせない。もはや、近代がなおざりにしてきたことを思い出す、あるいは反省する、などという悠長なことをいってられないのだ、という切迫感が、悪魔という形象でこの物語にあらわれているように感じた。